

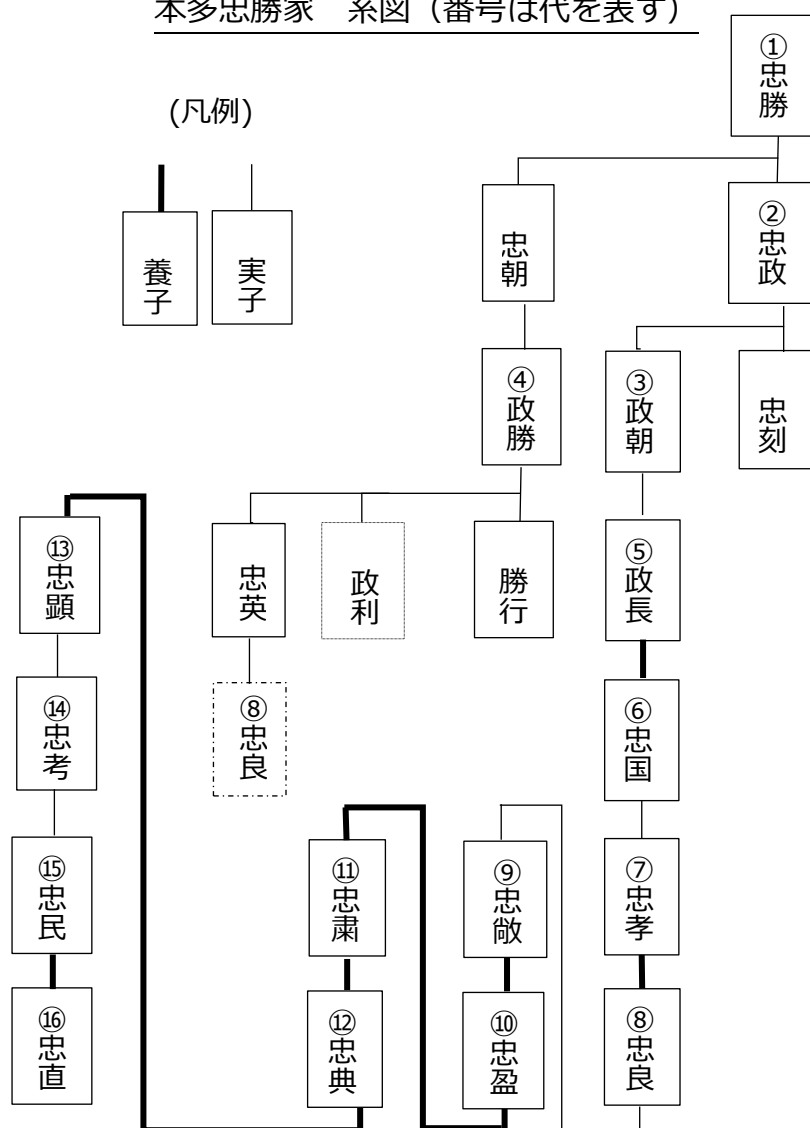
# 名家のお家騒動と岡崎城

中村 正

徳川四天王の一人を輩出した本多家と於大の方(家康公の母)の実家である水野家は長きに亘り岡崎藩主を務めた名家ですが、岡崎城で起きた名家のお家騒動について纏めてみました。

## 1. 九六騒動（郡山騒動）と本多政利の幽閉

本多忠勝家 系図（番号は代を表す）



忠政の長男 忠刻は相続前に亡くなったので次男の政朝が姫路 15 万石を相続し政朝は寛永 15 年 (1638 年) に亡くなり政長が未だ幼いため政勝が跡を継ぎ姫路から大和郡山へ移封した。大和郡山で政勝の跡目相続について政長を推す者と政勝の実子を推す者で家中が二分した。家老の都筑氏は政長を強く推し、幕府の裁定により政長 9 万石と政利 6 万石に分知された。(九六騒動又は郡山騒動といいます)

政長は 9 万石と早逝した勝行の 3 万石で 12 万石となったが、家老は幕府に不服を申し立て政長の死を契機に忠国は 15 万石で福島へ移封した。

政利は 6 万石で播磨明石、政利の弟忠英は 1 万石で播磨山崎に移封した。忠孝は幼少のため、平穩な越後村上へ転封したが宝永 6 年

(1709 年) 江戸藩邸にて 12 才で亡くなった。四天王の名家である本多家であることにより、幕府の計らいでお家断絶 (改易) は免れたが、15 万石から 5 万石に減知され、山崎藩主忠英の嫡子忠良

を継嗣に迎え本多家は存続した。本多家はこの減知で多くの家臣のリストラや俸禄の減少を伴った。

政利は15万石全てを相続できなかった不満で、延宝7年(1679年)政長を毒殺したとも伝えられ、他にも過酷な施策をした罪で天和2年(1682年)陸奥大久保藩1万石に減封の上、転封となったが、侍女の殺害、家臣への暴力等不行状が幕府の耳に入り元禄15年(1702年)庄内の酒井家から岡崎藩主水野忠之(享保の改革で将軍吉宗を補佐した老中)に預け替えとなり、座敷牢での生活後、宝永4年(1707年)67才で死去しました。法名は法性院殿雪窓覚夢大居士といい墓は能見東町の源空寺にあります。

小説家山本周五郎は本多政利の岡崎での様子について短編小説『茶摘は八十八夜から始まる』に著わしました。殿町、投町、伝馬町、あわ雪、光円寺、大林寺等当時の岡崎の情景や本多政利が初めて町人の生活に触れて改心していく姿や政利の世話をする相伴役の家老の息子水野平三郎、侍女萩尾こまちとの人間関係が感動的に表現されています。



本多政利の墓

## 2. 水野忠辰の政治と座敷牢での最期

水野家は享保の改革に携わった水野忠之<sup>ただゆき</sup>、天保の改革の水野忠邦<sup>ただくに</sup>、幕末の水野忠精<sup>ただきよ</sup>等三人の老中を輩出した名家です。水野家七代目の水野忠辰<sup>ただとき</sup>は元文2年(1737年)9月に14歳で岡崎6万石の家督を相続しました。江戸で生まれた水野忠辰は幼少の頃から学問を好み、病に倒れるのではないかと側近たちが心配するほど読書をし、祖父の忠之からも惜しみない愛情と薫陶を受け、将軍吉宗の人材登用や政治改革の理想、上に立つ者の在り方などに感銘し大きな影響を受けました。

当時の江戸から岡崎への旅程は7日間程であり、1日当たり45km以上歩いたこととなります。忠辰は初夏に岡崎に来て1年ほど岡崎で過ごした後、江戸で1年ほど政務をし、その後再度岡崎という具合に5回ほど岡崎で過ごした記録が残っています。

忠辰が初めて岡崎へ向かったのは寛保2年(1742年)19歳の時ですが賑やかな江戸から閑静な岡崎城に入り、恐らくは下級武士や百姓達の惨めな生活を何とかしたいと思ったに違いありません。

岡崎に着いた忠辰は直ちに賞罰厳命の吉宗の「仁の政治」の実現に取り掛かりました。元文年間の惨事には元文元年(1736年)の矢作川の洪水、元文3年(1738年)の干ばつ、元文5年(1740年)の矢作川決壊等があり6千石の減収となったため、破綻しかかっていた岡崎藩の財政の立て直しのために儉約を励行し、寛保3年(20歳)には家臣に渡す扶持米や切米も渡さなかった様である。これでは給与を渡さないのと同じことで藩士は困ったに違いありませんが、徹底した節約により数年で岡崎藩の金庫には約5万両の蓄えが出来ました。

また勤務成績を給禄、昇進、家督相続に反映させることにし、家柄や格式とは無関係に実力主義で人材登用を行うことにしました。礼と徳を重んじ、賞を重く、罰を軽くし賞罰厳命の仁政の基本方針としては間違っていないかもしれませんが、忠辰が新しい側近を登用していたことで問題が起きました。彼等は忠辰が江戸にいた頃から仕えていた中・下級の武士であり、元々初代 忠善<sup>ただよし</sup>の時代からずっと岡崎にいた守旧家臣ではなかったのです。寛延 2 年(1749 年)正月、忠辰は深刻な事態を迎えました。毎年城中で行われる年賀の会に登城しなければならない家老や年寄り等の老臣達が団結し、全員病氣と申し立てて登城せず、2 日になっても誰一人出仕しなかったという事件が起きました。

忠辰は次第に何事も動かなくなってゆくことに匙<sup>さじ</sup>を投げ、ついには側近たちを解任せざるを得なくなりしました。仁政の理想は敗北し、寛政 4 年 28 才になった忠辰は政務に嫌気がさし、江戸で酒色にふけるようになっていきました。ほかには心の憂さを晴らすすべがなかった様です。忠辰の側近も次々と御役御免、蟄居、入牢などを申しつけられ、政務から外され一掃されていきました。そして宝暦元年（1751 年）9 月 14 日、忠辰の母順性院が忠辰の遊蕩三昧の生活をやめさせるために自害しました。不行跡を諫めるための諫死<sup>かんじ</sup>でした。やがて 11 月 11 日、忠辰が順性院の墓参りに行くために寝所から表座敷へ出たところ、最も信頼していた部下が忠辰に飛びかかって腰の刀を抜きとり、忠辰を赤坂別邸内にある座敷牢に閉じ込めてしまいました。宝暦 2 年（1752 年）3 月幕府には「忠辰は発狂して隠居した。」と届けられ、家督はただちに同族の旗本水野平十郎の次男 忠任<sup>ただとう</sup>が継ぎました。翌年 8 月、忠辰は座敷牢のなかで悶々のうちに死去しました。まだ 29 歳で失意のあまり憤死したのであったのか、幕府の目を恐れて重臣たちが謀って刺客に斬殺させたのか、或いは毒殺されたのかもしれませんが。老臣達が支配をつづけた水野家はこの 10 年後の宝暦 12 年（1762 年）9 月に岡崎から肥前唐津に国替えとなりましたが、岡崎藩の藩債は 2 万両に膨れ上がっていました。

忠辰の思慮は若さゆえ浅はかであり、補佐役を得なかったことにあります。老臣との対話や世情を知ること、老臣を動かす力や政治の方向を変える器がなかった故に、遊蕩三昧に走ったのかも知れません。人生は読書ばかりではなく、邂逅、瞑目、思い出づくりが大切かと私は思っています。

出典：『特別展 本多忠勝とその家臣団』、『研究紀要第 6 卷(岡崎地方史研究会)水野忠辰』、  
『丕揚録』、『水野忠辰の夢と挫折』 (2020.9.10)